

[成果情報名] 諫早湾干拓地における加工用冬どりザーサイ(搾菜)の標準施肥量

[要約]加工用野菜「ザーサイ」は、9月は種の冬どりの作型で順調な生育を示す。

目標茎重600g(10a当たり収量 3,000kg)以上を確保できる窒素施肥量は25kg/10a以上で、元肥を条施肥により窒素20kg/10a、追肥5kg/10aを2回、総窒素30kg/10aの施肥体系で安定した収量を確保できる。そのときの収穫期は、は種後95日以上である。

[キーワード]ザーサイ、施肥量、条施肥

[担当]農林技術開発センター・干拓営農研究部門

[連絡先](代表) 0957-35-1272

[区分]総合・営農(干拓)、野菜

[分類]指導

[背景・ねらい]

諫早湾干拓地における大規模営農では経営安定の方策として、契約等による加工・業務用野菜の生産の重要性が高い。加工用野菜としてザーサイ(搾菜)が導入されているが、栽培例がなく標準施肥量は未設定である。そこで、諫早湾干拓地でのザーサイ(搾菜)の標準施肥量の設定と栽培法、減化学肥料施肥体系について検討する。

標準施肥量については、加工用として利用する主茎の株重を600g以上、10a当たり3,000kg以上の収量を目標として設定する。

[成果の内容・特徴]

1. ザーサイを三池タカナの春どり栽培と同様の10月下旬は種の作型で栽培すると、低温期に向かい初期生育は緩慢で、2月下旬以降急激に生育は旺盛となる。3月上旬には抽苔が始まり、開花直前の3月下旬でも茎重は430g程度であり、窒素施肥量15~35kg/10aのいずれの施肥体系でも3,000kg/10a以上の目標収量を確保することは難しい。(表1)
一方、9月中旬は種の作型では生育が良く、窒素施肥量30kg/10a以上の施肥で平均茎重600~700gとなり、目標収量を確保できる。(表1、図1)
更に2月上旬まで収穫期を延ばしても抽苔の発生はなく、平均茎重は700~800gに達する。(データ省略)
2. 冬どり栽培での施肥体系は、元肥の全面全層施肥よりは種位置下の条施肥で生育が優れる。(図1)
3. 冬どり栽培での窒素施肥量と平均茎重との関係から目標とすべき平均茎重を確保するのに必要な窒素施肥量は、25kg/10a以上である。(図2)
4. 冬どり栽培で、元肥を条施肥により窒素20kg/10a、追肥5kg/10aを2回、総窒素30kg/10aの施肥条件で目標茎重600gに達するのは、は種後95日以降である。(図3)

[成果の活用面、留意点]

1. 「ザーサイ」の加工部位は、主茎であり、本情報も主茎の生育、収量を基にしている。
主茎以外でも、葉は大葉でカラシナ類特有の辛みを持ち、三池タカナ、ちりめん青タカナより辛く、カラシナと同程度である。
側枝も適度に発生し、葉・側枝ともに加工用として利用可能である。-3℃未満の低温に遭遇しても主茎は問題ないが 外葉は凍害を受けるため利用できない。
主茎663gに対し、外葉、側枝は915g 全重1,578gでの収量は、8,700kg/10aとなる。
2. 主茎内部には、空洞のあるものが存在するが、褐変等の障害はなく加工上問題はない。
3. 今回供試した品種は、「四川搾菜」(中原採種場株)である。

[具体的データ]

表1 作型と生育及び収量

作型	は種日	調査月日	全重 (g)	茎重 (g)	10a収量 ※2) (kg/10a)	抽苔率 (%)
秋まき春どり	10/30	03/24	595 ± 137.7	435 ± 90.3	2,418	100
秋まき冬どり	09/21	01/06	1,578 ± 421.7	663 ± 151.7	3,683	

※1) 施肥体系は、元肥N-20kg/10a、追肥N-5kg/10aの2回

※2) 栽植株数 5.555株/10a 収量は加工向け茎重の収量

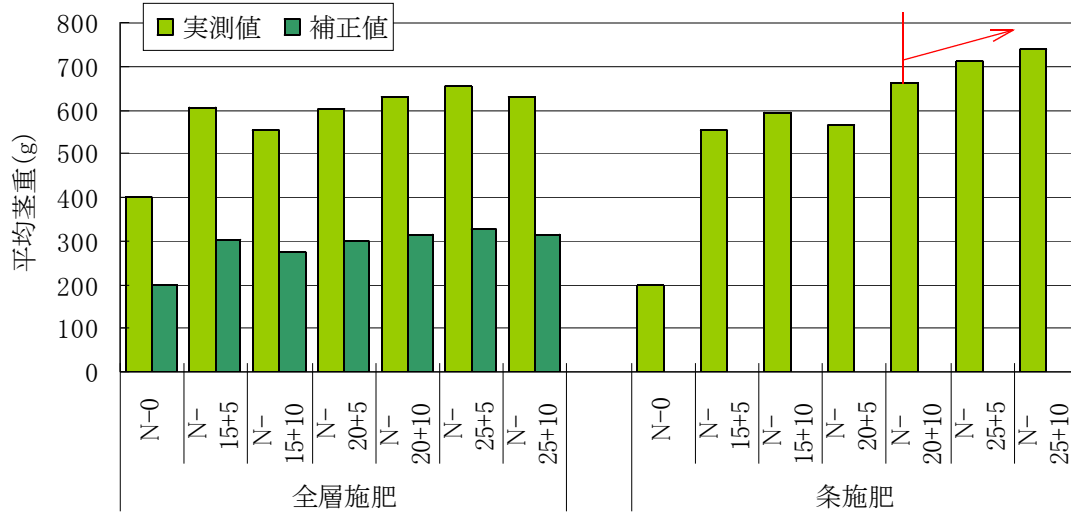


図1 秋まき秋冬どり栽培での施肥体系と平均茎重 (2010年1月6日調査)

※補正値は全層施肥、条施肥N-0の収量を同量として補正したもの 施肥設計の表記は、N-元肥+追肥

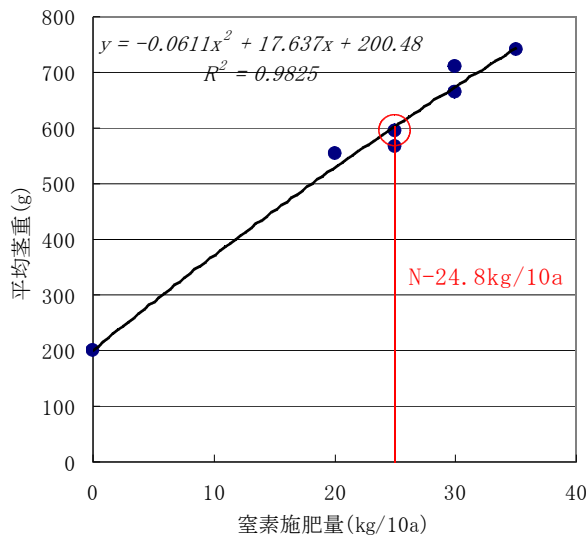


図2 秋冬どり栽培での窒素施肥量と平均茎重の関係

(※条施肥体系、は種後107日、1/6調査)

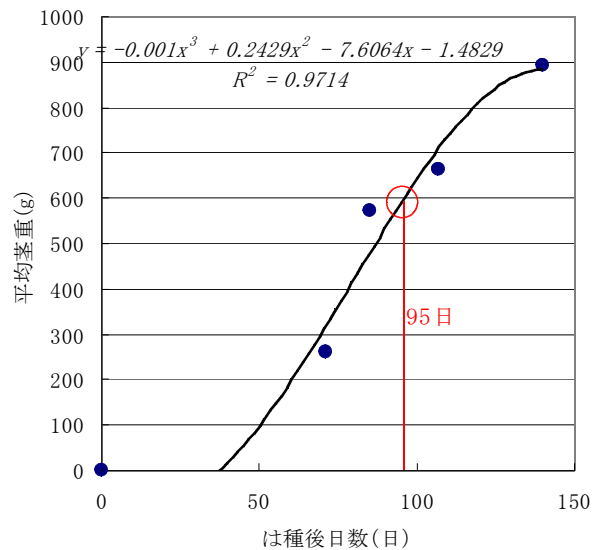


図3 秋冬どり栽培でのは種後日数と平均茎重の関係

(※条施肥、元肥N-20kg/10a、追肥N-5kg/10a×2回)

[その他]

研究課題名：諫早湾干拓大規模環境保全型農業技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：小林雅昭

発表論文等：なし